

『摂大乘論』における種子の六義について

近 藤 伸 介

はじめに

『摂大乘論』（以下 MS）における種子の六義とは、唯識において因を意味する種子（bija）の定義であり、それは次のように記されている。

外であると内であると、不明であると二であると、世俗的であると勝義的であると、それらすべては種子であり、〔その定義は〕六種とされる。〔すなわち〕①刹那存在であり、②〔果と〕同時に生じる。それは③連続して生じるとされる。④決定しており、⑤縁を待ち、⑥自らの果によって成就される。（Der.4048.Ri.7a7-b1, Pek.5549.Li.8a1-2）

MS にはこの記述のほか、特に説明はない。よって MS の注釈である、Vasubandhu の『摂大乘註』（*Theg pa chen po bsdus pa'i 'grel pa*）（以下、世親釈）、Asvabhāva の『摂大乘会釈』（*Theg pa chen po bsdus pa'i bshad sbyar*）（以下、無性釈）、チベット訳のみ現存する作者不明の『秘義分別摂疏』（*Don gsang ba rnam par phye ba bsdus te bshad pa*）（以下、秘義釈）に基づいて、種子の六義の意味するところを明らかにしたい。

1. 六義の一、刹那に生滅する（刹那存在 skad cig pa）

【世 1】またそれら〔種子〕は「刹那存在」であるが、〔それは外と内などの〕二者〔の種子〕とも生じた無間に滅するが故であり、種子の本質として常住ではあり得ないが故であり、〔なぜなら常住は〕そのように一切時において差別がない故である。（以下、世親釈の引用は Der.4050.Ri.132a6-b2, Pek.5551.Li.155b3-8）

【無 1】「刹那存在」というのは、生じる無間に滅するが故であり、〔もし常住であるならば〕差別がない故、種子は常住ではない。（以下、無性釈の引用は Der.4051.Ri.205a5-b3, Pek.5552.Li.251b3-252a2）

【秘 1】「刹那存在であり云々」ということによって「種子が六種〔の定義を持つこと〕」を示しているのであり、そのとき、常住から果が〔生じるとは〕認識されないが故、外と内の種子の二者は刹那的である。（以下、秘義釈の引用は Der.4052.Ri.335b1-336a2, Pek.5553.Li.402b6-403b1）

変化のない常住では果を生じないため、因である種子は刹那ごとに生滅を繰り返す

(120) 『撰大乘論』における種子の六義について（近 藤）

返す刹那存在でなければならない。

2. 六義の二、果と同時に生じる（果俱有 lhan cig 'byung ba）

【世2】「〔果と〕同時に生じる」こととは、過去でなく、未来でなく、〔時間的に〕相違なく、種子の〔存在する〕時において、何であれ、まさに〔そこに存在する〕ある物である果が生じることである。

【無2】「刹那存在」であるとしても滅してしまったものは存在せず、死んだ鳥が鳴くが如く、滅したのから果〔が生じること〕は適当でないが故、〔種子は〕「〔果と〕同時に生じる」。従って、果の〔存在する〕時と相違しないが故、種子は果と同時に存続するとされ、蓮華の根などの如くである。

【秘2】内の〔種子が〕果と「同時に生じる」ということはすでに成立しているが、外の〔種子〕もまた、「〔果と〕同時に生じる」ある物として知られており、例えば蓮華の根や水晶や灯火や影や芽などの如くである。〔そうであるから〕またあるいは外の一切種子であっても果と「同時に生じる」のである。種子と芽などは因果関係として異時を本質とすると知られているが、〔そこでも〕芽の状態において、種子は稲穀の粒の相続に従って生じている。それはそのようであって、このような芽などの相続の終りの時にもまた果が明確に成立するのである。相続に従って生じるそれ（種子）はまた、芽などと不可離であるが故、相応因（mtshungs par ldan pa'i rgyu）の如くに因はまたあるのであって、〔種子が〕「〔果と〕同時に生じる」こともまたあるとして相違はない。

秘義釈では、外の種子、すなわち植物の種子の因果同時の譬喩として蓮華の根、水晶、灯火、芽と影が用いられている。このうち灯火、芽と影は、『俱舍論』において俱有因の譬喩として用いられている（Pradhan, 1st ed., p.84.19-20）。また相応因の如くでもあるとして、種子と芽等の因果同時を心と心所になぞらえている。しかし上の引用にもあるように、種子と芽は本来「因果関係として異時を本質とすると知られている」ものであり、MSが厳密に唯識の立場を主張するものならば、植物の因果は仮のものとして斥けられるべきであろう。実際『成唯識論』に至っては、植物の種子は実の因ではないと明確に否定されている。

唯本識中功能差別具斯六義成種，非餘。外穀麥等識所變故，假立種名非實種子。（T31. 9b28-c1）

3. 六義の三、連続して生じる（恒随転 rgyun chags 'byung ba）

【世3】「それは連続して生じるとされる」とは、それ（種子）が依り所であるアーラヤ識に対治が生じるまで〔連続して生じる〕ということである。外の〔種子〕もまた根が生じるまで、そして熟するまで〔連続して生じる〕ということである。

【無3】「〔果と〕同時に生じる」としても、電光の如く、一と二と三の刹那に留まるので

はなく、一刹那ごとに展転することによって、長い間連続して生じるが故、「連続して生じる」のである。なぜそうなるのかと問うなら、根の利益と損害が枝等にもまた利益と損害となるが、そのことを〔種子は果に対して〕有するが故にである。

【秘3】外の種子は〔芽・茎などの〕相違する因と相応しない限り、ただ随順によって「連続して生じる」のである。内の〔種子〕はまた存在の支分の熏習 (srid pa'i yan lag gi bag chags) である種子であり、異熟の果を生じない限り〔連続して生じるのである〕。身見の種子と染汚の戲論の熏習である種子は対治が生じない限り〔連続して生じるのである〕。善と無記の戲論の熏習である種子もまた、諸々の声聞と独覚が般涅槃しない限り〔連続して生じるのである〕。如来の〔種子〕は金剛喩〔定〕(rdo rje lta bu) の間、ただ相續に従って「連続して生じる」のである。それ故、このことによって種子が「〔果と〕同時に生じる」としても、〔種子は〕電光の如く、一や二や三の刹那に留まることはないということが示されたのである。

秘義釈では、内の種子を4つに分類する。最初に滅するのは存在の支分の熏習である種子であり、これは異熟果を生じた時に滅する。2番目に滅するのは身見の種子と染汚の戲論の熏習である種子であり、これは修行等による対治が生じた時に滅する。3番目に滅するのは善と無記の戲論の熏習である種子であり、これは般涅槃に至った時に滅する。最後まで存続するのは如来の種子であり、これは金剛喩定において成就し、如来となる。秘義釈にはまた、次のようにある。

一切種子と煩惱によって蓄積された習気は、金剛喩三昧 (rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin) によって直ちに完全に破壊される。(Der.4052.Ri.305a7, Pek.5553.Li.367a1-2)

4. 六義の四、性質が決定している (性決定 nges pa)

【世4】「決定しており」というのは、一切の種子から一切〔の果〕が生じることはなく、各々〔の種子の性質・能力〕は決定しており、その種子からはそれ〔の果〕が生じるのである。

【無4】もし「連続して生じる」のなら、仮説としてまた種子を立てるが故、なぜ一切〔の種子〕から一切〔の果〕が同時に生じないのかと問うなら、答えて「決定している」というのであり、〔各々の種子の〕能力が「決定している」が故に、「連続して生じる」としても、一切〔の種子〕から一切〔の果〕が同時に生じることはない。

【秘4】もし「連続して生じる」ならば、なぜ一切〔の種子〕から一切〔の果〕が生じないのかと問うなら、「決定しており」と答えるのであり、ただある果に対してはある因が決定しているという意味である。

三者の注釈はほぼ一致しており、性決定は一切の種子から一切の果が生じるという混乱を避けるために述べられたとしている。

(122) 『摂大乘論』における種子の六義について (近 藤)

5. 六義の五、縁を待つ (待衆縁 rkyen la ltos pa)

【世5】「縁を待ち」[というのは]、一切の種子から一切〔の果〕が生じることはなく、ある縁を得たときに、それ(果)が生じることになるのである。

【無5】そのようであるとしても、なぜ一切時において果が生じないのかと問うなら答えて、「縁を待つ」というのであり、常に縁が近くにあるのでないが故、〔その答えに〕過失はないのである。

【秘5】「決定している」としても、なぜ一切時において果が生じないのかと問うなら、「縁を待ち」と答えるのであり、縁は常に近くにはないので〔その答えに〕過失はないのである。

無性釈と秘義釈は内容・文面ともにほぼ一致しており、種子がある特定の時にしか果を生じない理由として、種子は縁を待って因になると説明されている。

6. 六義の六、自らの果によって成就される (引自果 rang gi 'bras bus bsgrubs pa)

【世6】「自らの果によって成就される」ということについては、自らの種子から自らの果が生じるのであり、アーラヤ識からはアーラヤ識自体が〔生じ〕、また穀物からは穀物自体が〔生じ〕、そのようにまさに種子からは果が生じるのである。

【無6】その種子は何の種子かと問うなら、その問いに対して〔種子は〕「自らの果によって成就される」と言うのであり、種子と種子を有するもの(=アーラヤ識)は無始であるが故、その果がどんなものであれ、それ自体が種子である。

【秘6】しからばその種子は何の種子なのかと問うなら、その答えとして〔種子は〕「自らの果によって成就される」と言うのであり、諸々の種子と種子を有するもの(=アーラヤ識)は無始であるが故、この果がどんなものであれ、それ自体が種子である。

第4の性決定が種子の内的性質についての決定性であるのに対し、第6の引自果は種子から生じる果についての決定性である。両者により、種子と果の一对一対応が明確になる。また無性釈と秘義釈は内容・文面ともにほぼ一致している。

おわりに

秘義釈は無性釈と内容・文面ともにかなり一致しており、そこに独自の見解を加筆していると思われることから、無性釈の後に書かれたと推定される。

〈キーワード〉 bija, 種子, 『摂大乘論』, 『秘義分別摂疏』

(佛教大学大学院)